

近江版「青の洞門」



現在の西野水道

近江の「青の洞門」と呼ばれる西野水道。(地元では「西野隧道(※)」とも呼ばれています。)江戸時代後期(1845年)に、地域を洪水から守るため行なわれた大土木事業です。

高月町西野は、元は余呉湖と同時にできた西野湖のあったところであり、賤ヶ岳から山本山まで続く連山によって琵琶湖と隔てられた盆地状の低湿地。余呉川の洪水のたびに湛水被害を受けていました。なかでも1807年の豪雨は田畑を湖面化し大被害を与えました。

地元の僧・恵莊(えしょう)は、この連山の下にトンネルを掘り、余呉川の水を直接琵琶湖に放流することを計画。住民を説得して取り組みました。水道は高さ2m、幅1.5m、延長225m。工事は、石工がノミで掘り進め、岩盤の硬いところでは深夜までかかっても1日に6cmほどしか掘り進めなかったそうです。6年の歳月をかけて放水路は完成しました。現在は県指定史跡となっています。

なお、「青の洞門」とは、大分県中津市にあるトンネルのことで、江戸中期、禅海という和尚が、鎖渡しと呼ばれる難所で命を落とす人馬を見て、村人のために安全な道をつくることを決意し、30年もの長い歳月をかけ、ノミ一本で完成させたというトンネルです。長さは約342m。これを題材とした菊池寛の小説『恩讐の彼方に』でも有名になりました。

※ 隧道(ずいどう)とはトンネルのこと。

以上